

竹の台陳列館で開催された。審査委員長は福原鏝二郎。日本画部審査委員は小室翠雲、菊池契月、結城素明、鏑木清方、西山翠嶂、松林桂月、橋本関雪、川村曼舟、松岡映丘、西洋画部審査委員は藤島武二、満谷国四郎、中川八郎、南薫造、中沢弘光、長原孝太郎、太田喜二郎、金山平三、石川寅治、彫刻部審査委員は米原雲海、山崎朝雲、朝倉文夫、北村西海、北村西望、建畠大夢で、推薦制度による最初の推薦者は日本画が吉川靈華、池上秀畝、小村大雲、山内多門、平福百穂、池田輝方、田中頼璋、土田麦僊、川北霞峰、田近竹邨、西洋画が中村彝、片多徳郎、彫刻が堀進二、池田勇八であった（本校教官。―それ以外の本校卒業生）。

出品は入選、鑑査外出品合計三三二人で、本校関係者の出品については『東京美術学校校友会月報』第十八巻第五号によれば、入選者一七五人中の本校教員、卒業生、生徒は計一〇六名、うち日本画科一二名、西洋画科六三名、彫刻二一名であって、大変盛況であったことがわかる。授賞の会議は十月二十日に本校で行われ、その結果、推薦は西洋画の田辺至、牧野虎雄、大久保作次郎、特選は日本画の飛田周山、石崎光瑤、矢沢弦月、広島晃甫、西洋画の高間惣七、相馬其一、熊岡美彦、安宅安五郎、新井完、清水良雄、柚木久太、大野隆徳、彫刻の吉田三郎と決定した（本校教官。―それ以外の本校卒業生）。特に広島晃甫は出品作「青衣の女」の斬新さと長い間逼塞を続けた後の突然の栄光であったことと、さらに「青衣の女」が院展落選作であったことなどにより一躍脚光を浴び、文壇の宇野浩二と並んで画壇の広島晃甫ともてはやされた。彼は翌年の第二回帝展でも特選となった。

帝国美術院創設の際に文部大臣中橋徳五郎は、

更に時期を見て定員を増加し廣く音楽文藝等に互りても夫々大家を推薦網羅するの時代遠からず到来すべしと信ず 要するに今日は遠大なる企圖に對する端緒を開きたりと云ふに過ぎず

（大正九年九月七日『東京朝日新聞』）

と言明したが、それは昭和十二年六月二十四日の帝国芸術院設立に至って実現する。

⑨ 鎌田弥寿治留学

大正八年十月二十七日、臨時写真科教授（主任兼理事）鎌田弥寿治は光化学および写真製版研究のため満二年間米国、英国留学を命ぜられた。追って十一月七日、留学国にフランスを加えることを文部省より命ぜられ、翌九年一月十四日、陸軍省からも航空写真機の調査を囑託され、同年一月二十一日出發。翌十年二月四日にはさらに文部省からドイツ留学も命ぜられた。『日本写真教育史』（昭和五十年。東京写真大学短期大学部出版部）のなかで鎌田はこれについて次のように述べている。

筆者鎌田は、正木校長の意志通りに大正九年、文部省から光化学及び写真術研究のため、米国及英国、独逸国に留学を命ずとの辞令を貰い、大正九年一月出發、先づアメリカに渡り、次に英国、次に独逸、それから奥国に移り、アメリカの Rochester にある Kodak 会社〔註〕の Research Laboratory や、英国マンチン G. I. C.

C. shoot of Photo engraving and Lithography や 独逸の
[Scharfberg⁷⁾] [Hochschule⁷⁾]
Charten berg 249 Technische Hocho-Schule や 最後に奥国
[Graphischen Lehr- u. Versuchs Anstalt⁷⁾]
Wien 249 K. K. Graphischen Lehr-U-Versuchs-Anstalt für
[Technik]
Photographie und Reproduktion technich を 巡歴し最後の
Wien の 学校では約半年間程 Eder 先生および Valenta 先生の
指導の下で感光色素のことや写真乳剤製造のことを主として研究
して、大正十一年三月に帰朝した。もちろん、これ等諸国の写真
や印刷に関する研究所や実工場も多数見せてもらった。

芝浦に高等工芸学校を新設し、臨時写真科をそこへ移転させるこ
とは鎌田が留学する前に内定していた。したがって、帰国後暫くし
て鎌田をはじめ職員、施設がそっくり移転してしまつたので、この
留学の成果は本校ではほとんど生かされなかつた。

⑩ 東台彫塑会と朝倉文夫

大正八年十一月六日、本校彫刻科を卒業した官展花形作家たちが
中心となつて東台彫塑会を結成した。同年同月五日の『万朝報』は
次のように伝えている。

○東臺彫塑會

—— 斯界の花形を網羅す

東京美術學校出身の青年彫塑家連を一團とした東臺彫塑會は、六
日午後六時から上野精養軒に發會式を擧げる、顔觸は石川確治、
井上久繼、新田藤太郎、小倉右一郎、大國貞藏、片岡角太郎、吉
田三郎、内藤伸、矢野誠一、榊澤清、藤川勇造、幸崎伊次郎、朝

倉文夫、齋藤素巖、笹野恵三、島村治文、日名子實三、關野衷雲^{〔聖〕}
の十八氏、先づ彫刻界の花形を網羅したといつても可い、毎年一
回展覽會を開いて作品を發表する計畫もあり、青年實業家田鍋一
二氏が後援者として經濟方面を擔任すると云ふ 會員の一人石川
確治氏は曰く『恁う云ふ團體は反抗的に成立するものゝやうに思
はれる場合が多いが、此會は全くそれとは違ひ、殊に有力家の後
援もあり、幸福に發達することと思ひます』

同會は大正十年の第一回展、同十二年の第二回展、同十四年の第
三回展のほか、同十四年七月十七日に解散するまでに大阪市で二
回、福岡市で二回、佐世保市で一回、熊本市で一回展覽會を開き、
本校彫刻科卒業生の制作向上を助け、わが国彫塑界の中心勢力と目
れた。

東台彫塑會は上記のメンバーの合議により成立した会であるが、
次第に朝倉文夫以下数名が牛耳をとるようになった。帝展審査をめぐ
つて内紛が起こり、解散に至るが、それも朝倉の独断で決定した。
朝倉は銅像作家の渡辺長男(明治三十二年本校卒業。岡崎雪声の女婿)の
実弟で明治四十年本校彫刻科卒業。同四十二年研究科を終了した。
その前年の第二回文展に「闇」を出品して二等賞を獲得し、一躍名
を知られるようになり、その後も引続き第三回文展で「山から来た
男」が三等賞、第四回文展で「墓守」が二等賞、第五回文展で「土
人の顔」が三等賞、第六回文展で「若き日のかげ」が三等賞、第七
回文展で「含羞」が二等賞、第八回文展で「いづみ」が二等賞と、
立て続けに高位の賞を獲得し、大正五年の第十回文展より審査委員
となり、同八年九月、帝展審査委員となつた。大正七年六月および